



元気っ子

N o 348 ながさわ保育園

園 長

中 瀬 弦 偉

前回の「元気っ子」では、家庭における「躰」「言い聞かせ」の話をさせていただきました。そのことについて、今月はもう少し掘り下げてみようと思います。

保育の世界に従事していると、誰しも経験することだと思いますが、保育園の送迎の時などの様子を見ると「保護者の話を聞ける子」と「保護者の話を聞けない子」の両方の姿をよく見かけます。特に「聞けない子」の方はお父さん、お母さんが必死になって「言い聞かせ」「説得」をしていて目立つので、園外でも、例えば休日のショッピングモールやスーパーなどで見かけたことがある保護者もいらっしゃるかもしれません。こういったケースの場合、「聞ける子」に対してと「聞けない子」に対しての大人の言葉がけに大きな違いはないように思いますし、「聞けない子」に対しても大人が決して間違っただけを話しているようにも思えません。では、なぜこのような違いが生じるのか、その答えはイギリスの児童精神医学者ボウルビィの「愛着理論」でも証明されているように、実は「乳児期」にあることが分かっています。

子どもが愛着形成をしていくのは乳児期から十分に「応答的なかわり」を受けていることが前提になります。「応答的なかわり」とは先月のおたよりでも書かせていただいたように、子どもの気持ち・感情・要求等に対して、きちんと目を見て、その気持ちを「そうだよね、〇〇はそういう気持ちなんだね、分かるよ」と受け止めてあげることです。何度もこちらでも書かせていただいておりますが、これは決して「受け入れる」ことではないことは十分ご注意ください。子どもはこのように応答的に受け止めてもらえることを何度も何度も繰り返し経験することで、「自分は大切にされている存在」ということを認識していきます。これが自己肯定感です。乳児期にこの自己肯定感がしっかりと育まれていると「自分の気持ちをしっかりと受け止めてくれる人」が話すことは子どももきちんと聞き入れられるようになります。これが「聞ける子」に育つにつながっていきます。逆に乳児期に片手間だったり、目を合わせて話に耳を傾けるなど、十分に気持ちを受け止めてもらう経験をしないままに育ち、また大人からの一方的なルールや一貫性のないルール、高圧的に咎められたりするなど、納得のいかないことに縛られたりしてしまうと、うまく愛着形成が成立せず、「自分の話も受け止めてもらえないのに、何で自分は聞かないといけないのか」と聞き入れられなくなります。これが「聞けない子」に育つにつながってしまいます。

乳児期に十分こういったかわりと関係ができあがっているご家庭はそれほど気にする内容ではありませんが、もし自身のお子さんとのかわりの中でお心当たりのある方は、このことを意識してお子さんとのかわりをもつようにしてください。乳児期を過ぎているとなかなか簡単ではないかと思いますが、通常の倍以上の時間を要するかもしれませんが、根気よく続けていくことが大切です。また、乳児期をご家庭で過ごす入園前のご家庭においては、特にこういった子どもの発達過程を十分意識して育児を楽しんでください。発達を遂げるために必要な環境が用意されていなくてもいけませんし、早期教育も問題が生じやすくなります。発達の個人差を意識しながら、お子さんの次の発達段階を意識した環境づくりを工夫することは大変だったり苦勞をしたりすること多いですが、育児の楽しみの一つです。保育園は皆さまのサポーターです。お困りのことがありましたらいつでもご相談ください。